



Title	マテング語における不可譲渡名詞の状態表現
Author(s)	米田, 信子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2003, 13, p. 125-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71106
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マテング語における不可譲渡名詞の状態表現

米 田 信 子

1. はじめに

1.1. 目的

マテング語は、ニジェール・コンゴ語族に属するバンツー諸語のひとつで、タンザニア西南端に位置するンビンガ県で話されている。マテング語では、所有者と不可譲渡の関係にある所有物の状態を表す場合に、ひとつの自動詞が同じ形のままで2種類の名詞句、すなわち「対象となっている所有物」と「その所有者」の両方を主語にできる。本稿では、このような2種類の主語を取り得る不可譲渡名詞の状態表現を観察し、その条件と機能について検討する。なお本稿で用いるデータはすべて筆者がフィールドワーク¹で集めたものである。

1.2. マテング語の文法概要

本論に入る前にマテング語の文法のうち、本稿に関係する部分のみ簡単に説明する。

1.2.1. マテング語の音と表記

マテング語の母音と子音は次のとおりである。

母音：短母音	/ i, e, ɛ, a, u, o, ɔ /
長母音	/ i:, e:, ɛ:, a:, u:, o:, ɔ: /
子音：破裂音	/ p, b, t, k, g /
摩擦音	/ s, h /
破擦音	/ dʒ / (→ [dz] N__)
鼻 音	/ m, n, ɲ, ŋ /
接近音	/ l / (→ [d] N__)
半母音	/ w, j /

マテング語は正書法が定まっていない。本稿では基本的に音韻表記とするが、/nd₃/と /nl/は、それぞれ ndz, nd のように音声表記としている。マテング語には声調の対立があるが、本稿には直接関係しないので、声調の表記は省略する。

1.2.2. マテング語の文法呼応接辞

マテング語の名詞は 19 種類の名詞クラスに分れている。名詞クラスとは、マテング語の文法呼応の基盤となるものである。それぞれのクラスには独自のクラス接頭辞があり、そのクラス接頭辞によって、名詞が属しているクラスが示される。修飾語は被修飾名詞が属している名詞クラスに呼応した接辞をとり、動詞は、主語名詞や目的語名詞が属している名詞クラスに呼応した接辞をとる。各名詞クラスのクラス接頭辞と呼応接辞は以下の表に示すとおりである。

＜各名詞クラスの名詞クラス接頭辞・主語辞・目的語辞＞

クラス	名詞クラス接頭辞	主語辞	目的語辞
1 1sg.	-	n-	n-
2sg.	-	gu-	gu-
3sg.	mu-	d ₃ u-	mu-
2 1pl.	-	tu-	tu-
2pl.	-	mu-	mu-
3pl.	ba- / a-	ba- / a-	a-
3	mu-	gu-	gu-
4	mi-	d ₃ i-	d ₃ i-
5	li-	li-	li-
6	ma-	ga-	ga-
7	si- / ki-	ki-	ki-
8	hi- / i-	i-	i-
9	φ- (in-, n-)	d ₃ i-	d ₃ i-
10	φ- (in-, n-)	i-	i-
11	lu-	lu-	lu-
12	ka-	ka-	ka-
13	tu-	tu-	tu-
14	u-	gu-	gu-
15	ku-	ku-	ku-
16	pa-	pa-	pa-
17	ku-	ku-	ku-
18	mu-	mu-	mu-
20	gu-	gu-	gu-

1.2.3. 文の構造と語順

基本的な語順はSVOである。連体修飾語は常に名詞の後ろに位置する。

主語	連体修飾語	動詞	目的語	連体修飾語	文修飾語
ki-dzuni	ki-kolongu	kjunhɔpwi	ŋ-kɔsi	dzu-angu	pu-lubandza
「鳥(7)」	「大きい(7)」		「友人(1)」	「私の(1)」	「裏庭 loc(18)」 ²
↓					
「鳥が裏庭で私の友人をつついた」					
動詞 : ki- a- mu- hɔpɔl -iti					
S(7)・過T・O(1)・「つつく」・完F					

動詞の構造は「主語辞－時制辞－目的語辞－動詞語幹－語尾」である。主語辞（例文グロスの中ではS）と目的語辞（例文グロスの中ではO）は、それぞれ主語名詞、目的語名詞が属している名詞クラスに呼応して動詞につけられる呼応接辞である。主語名詞や目的語名詞が省略されている場合には、主語辞と目的語辞は代名詞として機能する。

lu- a- gu- lum - iti	「それ(11)が君を刺した」
S(11)・過T・O2sg・「かむ」・完F	

主語辞は動詞に常に必須の要素であるが、目的語辞は目的語名詞が人物の場合にのみ必須で、目的語名詞が人物以外の場合には目的語辞をつけないのが一般的である。目的語名詞が表示されているにも拘わらず目的語辞をつけると、目的語が強調あるいは限定される。

dzu - li- kadzul - iti	lilombi	「彼がその卵を割った」
S3sg・O(5)・「割る」・完F	「卵(5)」	

マテング語の名詞には格標示はないが、名詞に文法呼応している動詞接辞によって名詞の役割が明確である限り語順は流動的である。

a) ludzusi	lundumiti	kapenga	「蜂がカピング氏を刺した」
主語	動詞	目的語	
ludzusi	lu - a - mu - lum - iti	kapenga	
「蜂(11)」	S(11)・過T・O(1)・「かむ」・完F	「カピング氏(1)」	

b) kapenga lu-dzusi lu-ndumiti
 目的語 主語 動詞

c) kapenga lu-andumiti ludzusi
 目的語 動詞 主語

主題化される名詞句は動詞の前に置かれる。主語名詞がある場合には、主語名詞の前に主題化される名詞句が位置する。人物が目的語であれば呼応するO辞を必ず付けなければならないが、5dのように目的語が主題化された場合にはその限りではない。

d) kapenga ludzusi lu- a- lum -iti 「カピング氏は蜂が刺した」
 「カピング氏(1)」 「蜂(11)」 S(11)・過T・「かむ」・完F

2. 不可譲渡名詞の状態表現

2.1. 状態表現の主語

マテング語では、所有物の状態を表す際に、ひとつの自動詞が同じ形態のままで2種類の名詞句を主語にとることができる場合がある。

1a) maboku gane ga- pilil - iti 「私の手が汚れている」
 「手(6)」 「私の(6)」 S(6)・「汚れる」・完F

1b) n- pilil - ite maboku 「私が手が汚れている」³
 S1sg・「汚れる」・完F 「手(6)」

1aと1bはいずれも、自分の手が汚れている、という同じ状態を表している。1aでは「汚れる」という自動詞 -pilil- の主語になっているのは、状態表現の対象になっているもの、つまり「手」である。1bでも同じ自動詞が用いられているが、主語は対象自体ではなく、その所有者である「私」である。その際、「手」は動詞の後ろ、つまり目的語の位置に置かれているが、次の1cが示すように、「手」に呼応した目的語辞を動詞につけると非文になることから、これは目的語ではない。

1c) *ne n- ga- pilil - iti maboku
 「私」 S1sg-O(6)・「汚れる」・完F 「手(6)」

またマテング語では、自動詞と他動詞の形態が常に異なる。従って同じ動詞が他動詞として機能しているわけではなく、1b は自動詞文である。

2a) lilombi li - kad3uk - iti 「卵が割れた」
「卵(5)」 S(5)・「割れる」・完 F

2b) d3u - kad3ul - iti lilombi 「彼が卵を割った」
S3sg・「割る」・完 F 「卵(5)」

このように、「所有者」と「所有物」の両方が同じ自動詞の主語になることができるのは、所有物に関する描写のうち、いわゆる「不可譲渡」の関係にある場合である。以下に同様の例を挙げる。いずれも a は対象となっている不可譲渡の所有物が主語、b はその所有者が主語になっている。

3a) lihupa ljake li - tunuk - iti 「彼の骨が折れた」
「骨(5)」 「彼の(5)」 S(5)・「折れる」・完 F

3b) d3u - tunuk - iti lihupa 「彼が骨が折れた」
S3sg・「折れる」・完 F 「骨(5)」

cf. d3u - tunul - iti lihupa 「彼が骨を折った」
S3sg・「折る」・完 F 「骨(5)」

4a) ku - a - bagad3 - a(d3ε) kuboku kwangu 「私の手が震えた」
S(15)・過 T・「震える」・非完 F 「手(15)」 「私の(15)」

4b) n - a - bagad3 - a(d3ε) kuboku 「私が手が震えた」
S1sg・過 T・「震える」・非完 F 「手(15)」

5a) sobu sa ne ki - d3alakuk - iti 「私の爪が剥がれた」
「爪(7)」 属 (7) 「私」 S(7)・「はがれる」・完 F

5b) n - d3alakuk - iti sobu 「私が爪が剥がれた」
S1sg・「はがれる」・完 F 「爪(7)」

6a) lid3undzu ljake li - habuk - ili pae 「彼女の髪が落ちた」
「髪(3)」 「彼の(5)」 S(5)・「落ちる」・完 F 「下」

6b) d3u - habuk - ili pae lid3undzu 「彼女が髪が落ちた」
S3sg・「落ちる」・完 F 「下」 「髪(3)」

- 7a) mihu gaki ga- twelel - iti maholi 「彼の目が涙で一杯だ」
「目(6)」 「彼の(6)」 S(6)・「一杯である」・完 F 「涙(6)」
- 7b) d3u - twelel - iti maholi mu-mihu 「彼が目が涙で一杯だ」
S3sg・「一杯である」・完 F 「涙(6)」 「目 L(18/6)」
- 8a) mihu ga pusi ga - nanan - a ikilu 「夜、猫の目が光る」
「目(4)」 属(4) 「猫(9)」 S(4)・「光る」・基 F 「夜」
- 8b) pusi d3i - nanan - a mihu ikilu 「夜、猫が目が光る」
「猫(9)」 S(9)・「光る」・基 F 「目(4)」 「夜」

2.2. 不可譲渡とみなされるもの

何を不可譲渡とみなすかは、言語によって違いがあるが、マテング語の場合には身体の一部や体内からの分泌・老廃物などに限られる。父親や子供といった近い関係にある場合でも親族は不可譲渡名詞には含まれない。次のような場合には、所有物は譲渡可能な物であり、所有者を主語にすることはできない。

- 1d) * n - pilil - ite ingobu (私が服が汚れている)
S1sg・「汚れる」・完 F 「服(9)」
- 3c) * d3u - tunuk - iti mbeu (彼が杖が折れた)
S3sg・「折れる」・完 F 「杖(3)」
- 6c) * d3u - habuk - ili pae qhaku (彼女がかばんが落ちた)
S3sg・「落ちる」・完 F 「下」 「かばん(3)」
- 6d) * d3u - habuk - ili pae mwana (彼女が子供が倒れた)
S3sg・「落ちる」・完 F 「下」 「子供(1)」

体内にある物でも外部から入れられたものの場合には、譲渡不可とはみなされない。従って所有者を主語にすることはできない。

- 9a) ndomo gwaki gu - twelel - iti kilebe 「彼の口が食べ物で一杯だ」
「口(3)」 「彼の(3)」 S(6)・「一杯である」・完 F 「食べ物 (7)」
- 9b) *d3u- twelel -iti kilebe mu-ndomo (彼が口が食べ物で一杯だ)
S3sg・「一杯である」・完 F 「食べ物 (7)」 「口 Loc (18/3)」

ただし次のように、容認度にゆれがある場合もある。

- | | | | |
|----------------------------|-----------|--------------------|---------|
| 10) ? n - bo - iti | kipini | pa-imbulu | dʒangu |
| S1sg - 「外れる」・完 F | 「鼻ピアス(7)」 | 「鼻 Loc (16/9)」 | 「私の(9)」 |
| | | 「私が私の鼻から鼻ピアスが外れた」 | |
| | | | |
| 11) ? n - bɔpɔk - iti | ingobu | 「私が(身体に巻いた)布がほどけた」 | |
| S1sg - 「ほどける」・完 F | 「布(9)」 | | |
| | | | |
| 12) * gwe gu - bɔpɔk - iti | ingobu | (君が布がほどけた) | |
| 「君」 S2sg - 「ほどける」・完 F | 「布(9)」 | | |

譲渡が可能なように思われるものでも、ピアス、腰につけているビーズ、身体に巻いている布などのように、常に身につけている物の場合には所有者を主語とした表現が用いられることもある。ただし所有者が1人称単数の場合に限られる。また、10、11を非文とする人もいる。つまり不可譲渡としてみなされる範囲には、核となる部分と周辺的な部分があり、周辺的なものに対する捉え方に個人差がある、と言える。核となるのは、身体、身体の部分、分泌物、排泄物などで、これらは誰もが譲渡不可として捉えている。それに対して、常に身につけているものというのは、周辺的なものである。周辺的なものの場合には不可譲渡であると捉えるかどうかには話者による差が出てきている。たとえ不可譲渡と捉えられる場合であっても、主語になる所有者に制限があるなど、核となる不可譲渡名詞とは違いが見られる。

2.2.1. 不可譲渡以外の条件

1～8の例は人（あるいは動物）と所有物であるが、物（人の場合の「所有者」にあたると思われる）とその部分の場合には、物を主語にできる条件がさらに制限される。

- 13a) magolu ga kiteu ga - tunuk - iti 「椅子の足が折れた」
「足(6)」 属(6) 「椅子(7)」 S(6)・「折れる」・完 F
- 13b) kiteu ki - tunuk - iti magolu 「椅子が足が折れた」
「椅子(7)」 S(7)・「折れる」・完 F 「足(6)」

14a) limbandi lju ŋkɔŋgu li - tunuk - iti 「木の枝が折れた」
「枝 (5)」 属(5) 「木(3)」 S(5) - 「折れる」 - 完 F

14b)* ŋkɔŋgu gu - tunuk - iti limbandi (木が枝が折れた)
「木(3)」 S(3) - 「折れる」 - 完 F 「枝 (5)」

13 と 14 は、どちらも物とその部分を主語にした文である。13 は部分を主語にすることができるのに対して、14 では部分を主語にすると非文になる。物の場合の状態表現では、その部分が不可譲渡であるかどうかだけでなく、問題となっている部分の状態が「全体の状態に関わっているかどうか」が問題になってくる。例えば 13 の場合には、椅子の足が壊れていれば、椅子全体が壊れていると言えるのに対して、14 のように木の枝の場合は、それが折れていても、木全体が倒れていることにはならない。その場合には、その状態が起こっている「部分」しか主語にすることができない。

形容詞文にも同様の条件が見られる。形容詞文の場合にも所有者と所有物の両方を主語にできる場合があるが、所有者を主語にできるのは、所有物が不可譲渡名詞であるだけでなく、表わされている状態が所有者の状態に直接係わっている場合のみである。

15a) magolu gake ga - be - iti malasu 「彼の足が長い」
「足(6)」 「彼の(6)」 S(6) - be - 完 F 「長い(6)」

15b) dzu - be - iti ndasu magolu 「彼が足が長い」
S3sg - be - 完 F 「長い(3sg)」 「足(6)」

15c) * dzu - be - iti ndasu maboku (彼が手が長い)
S3sg - be - 完 F 「長い(3sg)」 「手(6)」

15d) * dzu - be - iti ndasu madzɔndzu (彼女が髪の毛が長い)
S3sg - be - 完 F 「長い(3sg)」 「髪(6)」

「足が長い」ことは「彼が背が高い」ことに直接係わっているが、「手が長い」ことや「髪の毛が長い」ことは「彼」の背の高さとは関係ない。従って「足」の場合は所有者である「彼」を主語にすることができるが、同じく不可譲渡名詞であっても「手」や「髪」の場合には非文になる。

3. 主題化とフォーカス

描写の対象になっている所有物自体ではなくその所有者を主語にすることは、どのような機能を担っているのだろうか。他のバンツー諸語における同じような現象や日本語の「～は・・が」構文で言われている「主題化」あるいは「フォーカス」についてマテング語の場合を考えてみる。

マテング語の主題化は、主題化する名詞句を主語の前に持ってくる。例えば「私」を主題化するためには、「私」という単語 *ne* を動詞の前に表示する必要がある。*ne* を動詞の前に置けば、1a でも「私」を主題化することができる。*maboku* を主題化する場合も同様である。

1a) *maboku gane ga- pilil - iti* 「私の手が汚れている」
「手(6)」 「私の(6)」 S(6)・「汚れる」・完 F

1b) *n- pilil - ite maboku* 「私が手が汚れている」
S1sg・「汚れる」・完 F 「手(6)」

1a') *ne ga- pilil - ite maboku* 「私は手が汚れている」
「私」 S(6)・「汚れる」・完 F 「手(6)」

1b') *ne n- pilil - ite maboku* 「私は手が汚れている」
「私」 S1sg・「汚れる」・完 F 「手(6)」

従って、1b のように「私」を主語にすることはその部分を主題化しているわけではない。むしろ、物と部分の場合や形容詞文の場合にその状態が全体の状態に関わっていなければ所有者を主語にできないことを考えると、所有者を主語にすることは動詞の後ろに提示された名詞をフォーカスしているように思われる。動詞の後ろにおかれる名詞がなくても文は成立するし、すでに全体の状態を表している。そこにあえて「部分」を表す名詞を提示することで、より限定された情報が提供されているのである。1b では *maboku* がなくても文は成立し、「私」に関するある程度の状態がすでに示されている。そこへさらに *maboku* を続けることによって、汚れているのが「手」であることをフォーカスしていると考えられる。

さて、16 ～ 18 のように、起点となる「身体の部分」がある場合は、「所有者」，「身体の部分」，「分泌物」の3つとも主語になることができる。

- 16a) lihogatela li - pit - iti η-hjega dzake
「汗(5)」 S(5)・「出る」・完 F 「身体 loc(18/9)」 「彼の(9)」
「汗が彼の身体からでた」
- 16b) dzu - pit - iti lihogatela η-hjega dzake
S3sg・「出る」・完 F 「汗(5)」 「身体 loc(18/9)」 「彼の(9)」
「彼が身体から汗がでた」
- 16c) hjega dzake dzi - pit - iti lihogatela
「身体(9)」 「彼の(9)」 S(9)・「出る」・完 F 「汗(5)」
「彼の身体が汗がでた」
- 17a) ga - holol - a mahundika mu-imbulu dzaku
S(6)・「たれる」・基 F 「鼻水(6)」 「鼻 loc(18/9)」 「彼の(9)」
「鼻水が彼の鼻から垂れている」
- 17b) dzu - holol - a mahundika mu-imbulu dzaku
S3sg・「たれる」・基 F 「鼻水(6)」 「鼻 loc(18/9)」 「彼の(9)」
「彼が鼻から鼻水が垂れている」
- 17c) imbulu dzaku dzi - holol - a mahundika
「鼻(9)」 「彼の(9)」 S(9)・「たれる」・基 F 「鼻水(6)」
「彼の鼻が鼻水が垂れている」
- 18a) mwahi gu- pit - a mu-magolu ga dzimbwa
「血(3)」 S(9)・「出る」・基 F 「足 loc(18/6)」 属(6) 「犬(9)」
「犬の足から血が出ている」
- 18b) dzimbwa dzi - pit - a mwahi mu-magolu
「犬(9)」 S(9)・「出る」・基 F 「血(3)」 「足 loc (18/6)」
「犬が足から血が出ている」
- 18c) magolu ga dzimbwa ga - pit - a mwahi
「足(6)」 属(6) 「犬(9)」 S(6)・「出る」・基 F 「血(3)」
「犬の足が血が出ている」

a は不可譲渡の所有物, b は所有者, c は起点が, 自動詞の主語になっている。b, c は起点となる部分が場所クラス⁴をとっているが, c は場所クラスではなく, 一般名詞の形であらわれている。すなわち c では「起点」という場所としての機能はなく, それが文の主題として取り上げられているのである。つまり「起点」となる部分を主語にすることは, その部分の主題化である。これについては, 小森(1991)もスワヒリ語の同様の例に関して

「『物』を、いわば TOPIC として取り上げ、『場所』としてではなく、その『物』自体について何らかの状態を述べる文になっている」と述べている。

4. スワヒリ語との違い

さて、自動詞が2種類の主語をとる現象は、名詞クラスや呼応システムと並んで、多くのバンツー諸語に共通して見られる現象である。ここで、小森（1991）のスワヒリ語の例と比較し、マテンゴ語との違いをみる。

スワヒリ語

- | | | | | |
|-------|--------------------|-------------------------|--------------------|-------------|
| 19a) | Machosi | ya-na-m-chiririk-a | mtoto | 「子供から涙が溢れた」 |
| | 「涙(6)」 | S(6)・現 T・O(1)・「溢れる」・基 F | 「子供(1)」 | |
| 19b) | Mtoto | a-na-chiririk-a | machosi | 「子供が涙が溢れた」 |
| | 「子供(1)」 | S(1)・現 T・「溢れる」・基 F | 「涙(6)」 | |
| 20a) | Mguu | u-li-ni-vimb-a | | 「私の足は腫れた」 |
| | 「足(3)」 | S(3)・過 T・O1sg・「腫れる」・基 F | | |
| 20b) | Ni-li-vimb-a | mguu | | 「私は足が腫れた」 |
| | S1sg・過 T・「腫れる」・基 F | 「足(3)」 | | |
| 20c)? | Mguu wangu | u-li-vimb-a | | (私の足は腫れた) |
| | 「足(3)」 | 「私の(3)」 | S(3)・過 T・「腫れる」・基 F | |

19a では所有者の「子供」と呼応した目的語辞が動詞につけられている。また 20a では、所有者が目的語辞で現われている。このような表現はマテンゴ語ではできない。一方 20c のような表現は、1～10 の例に挙げたようにマテンゴ語では可能である。スワヒリ語の場合はこのような表現にすると、「私の足」が私の身体を離れているような印象になる。つまりスワヒリ語では、「私の～」という所有代名詞を用いた表現は、譲渡が可能な所有物に対してなされる表現であって、身体の部分に関する描写の場合には用いられない。身体の一部は所有物ではなく「私自身」として扱われていると考えられる。マテンゴ語においても身体の部分に対して同様の扱いがなされる場合もある。

マテング語

21a) d3u - a - n - lapul - a mu-umutu 「彼が私の頭を叩いた」
S3sg-過 T- O1sg - 「叩く」・基 F 「頭 loc(18/3)」

21b) ? d3u - a - lapul - a umutu gwangu

21a では, lapul「叩く」の目的語は, 動詞の後ろにある umutu「頭」という名詞ではなく, 「私」である。「私」を表す ne 自体は省略されているが, 1 人称単数の目的語に呼応する目的語辞が動詞につけられていることからそのことがわかる。叩くという行為が及んだのは「私の頭」であるが, それは「私自身」を叩いたのと同じ扱いになる。そして動詞の後ろに「私のどこを叩いたか」という情報が, 場所クラスの名詞として現れている。それに対して, 21b のように「私の～」という所有代名詞を用いて表現すると, 頭が自分とは離れたもの, 例えば「自分の獲物の頭」のような場合にしか使えない。このように他動詞の目的語として現れている場合にはマテング語もスワヒリ語と同じ扱いになるが, 自動詞の状態表現の場合にはスワヒリ語と違って不可譲渡名詞にも所有代名詞を用いることができる。

5. まとめにかえて

以上, マテング語に見られる状態表現の主語に関する概要を述べた。マテング語に限らず本稿で取り上げた自動詞の 2 種類の主語はバンツー諸語に広く見られる現象であるが, 当然ながら言語によって細かな違いが見られる。ここで用いたデータは, 本稿のテーマのために特別に集められたものではなく, 総括的な記述のために集めたデータの中から取り出したものである。従って極めて限られている。主題化とフォーカスについても少し触れたが, さらにデータを収集し, 主題化およびフォーカスの問題を中心に, 主語の取り方とその機能について詳しく調べていきたいと考えている。

注

1. loc は場所クラスを表す。場所クラスとは, 名詞に「場所クラス接頭辞」と呼ばれる接頭辞がついたものである。場所クラス接頭辞をつけることによって, 名詞に「～から」, 「～で」, 「～の中で」といった意味が加えられる。

2. フィールドワークは文部省科学研究補助金（国際学術研究）「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造」（研究代表者：大阪外国語大学宮本正興教授）により、1996年9月～1997年2月、1997年7月～11月、1999年1月にタンザニア南西部ンビンガ県で行なった。インフォーマントは1932年ンビンガ県リテンボ生まれのマテング人男性の C.S. Ndunguru Kamchatika 氏。両親、配偶者ともマテング人である。
3. 「私が手が汚れている」は自然な日本語にすれば「私は手が汚れている」となるが、「は」を用いると「私」が主題であるような印象を与えてしまう。そのことを避けるため、主語辞を日本語の主語マーカーと対応させて、不自然な日本語訳ではあるが「が」を用いる。

参考文献

- Bresna, J. & J. M. Kanerva.1989. "Locative Inversion in Chichewa: A Case Study of Factorization in Grammar" *Linguistic Inquiry* 20:1, 1-50
- 小森淳子 1991. 「スワヒリ語に見られる主語交替現象について」『言語学研究』10, 京都大学文学部言語学科
- 野田尚史 1996. 『「は」と「が」』くろしお出版
- 米田信子 2000. 『マテング語の記述研究－動詞構造を中心に』東京外国語大学に提出した博士論文